先端課題研究 11「『脱／文脈化』を思考する」
第 22 回会合 「序論」の後半について

話題提供：大杉高司
20130130

Ⅰ．デリダに倣う：「不真面目」の救出

…かくしてオースチンの目論見とは反対に、「不真面目」な枠組みの外へと出立し「通常の状態」を希求すればするほど、私たちは文脈の無際限の広がりに眩暈し、意味や力の不確定性に直面させられることになるのである。

Ⅱ．デリダに抗う：「真面目」への再接近

かように文脈は、つねに生成途上にある。しかし、ここで繰り返し強調しておきたいのは、文脈が絶えざる脱文脈化―再文脈化の流れのなかで暫定的、部分的にたち現れるにすぎないのだとしても、なお私たちは実践的な文脈を必要とし、事実さまざまに文脈化を試みているらしいことである。だが私たちは、この実践的な文脈化についてどの程度よく知っているのだろうか。…[中略]…分かったつもりになっている文脈に対してでさえ、用心深く「方法論的無教養主義」の立場をとるほうが、少なくとも私たちが今ここで設定しようとしている文脈においては、実りが多いはずだ。…[中略]…「真面目さ」が主体の現前という錨から解き放たれたのだとすれば、それが様々に実践的な目的で、多様な様式と美学で編みあげられる文脈に依存しているらしいと想像するのは、ごく当然のことのように思われる。そして、そもそもの脱構築、あらゆる脱文脈化の歓喜、興奮、苦悶もまた、私たちの良く知らぬ路地裏で地道かつ多様に繰り広げられるこの「真面目」な仕事に、むしろ依存しているらしいと想像するのも、また当然のことに思われるのだ。

実践的な文脈の多様なあらわれの仔細に目を凝らし、それを文脈化と脱文脈化の鬩ぎ合いのなかに捉えること。これが、専門を異にする本論集の執筆者の各々に、筆者がいわば最低限の「神話的暴力」[ベンヤミン]として課した共通の課題[すなわち、ここでの実践的文脈]であり、また分野を超えたこの「真面目」な対話の実践的な目的である。

Ⅲ　複数の脱／文脈化

（Ⅱの終わりから）

…この複数の文脈化は、ひとまず二つの異なる文脈化に類別することができるだろう。一つは、諸学の研究対象が、対象内在的に展開している（とされる）文脈化、また一つは、研究者が研究の目的にそって対象をくくりだす際の文脈化である。この二種の文脈化を、さらに人類学者マーク・ホバートが指摘するまた一つの類別、内的文脈 internal context と外的文脈 external context の対立に関連付けながら、順に見て行きたい[Hobart 1982; also Dilley 1999]。蛇足ながら、対象内在的文脈化と研究者による文脈化、内的文脈と外的文脈の二組の対立は、相対的で暫定的な区別（文脈化の文脈化）に過ぎず、また分類することそれ自体に意味があるわけでもないことは、これまでの論述の流れからも了解いただけるだろう。サールのいうように、これはただ研究上の出発点にすぎない。ただし、注意していただきたいのは、この二組の対立が必ずしも相互に重なりあわない点である。

前回、序文のⅠ・Ⅱの説明で、「実践的な目的にのっとって」立ち上げられる「文脈」の流動性・可変性を強調した（cf.オースチンの「慣習」＜＜井頭さんのコメント）。文脈が外へも内へも無際限に探索可能であること、text と context の解釈学的循環、実践的目的が厳密に共有されずに進行する協同活動などが、この流動性や可変性を説明する。その際に、思考の出発点として足場にしたのは、発話行為という、そもそもが流動的な相互行為だった。

しかし、「脱／文脈化」の多様な様式と美学は、このような対面的な相互行為だけでは汲みつくせ

ない。立ち現われては消える対面状況だけでなく、知・制度・モノに堆積していく「文脈」も視野に収めたい。しかしだからといって、「慣習」という言葉がともすれば想起させてしまう、固定性や閉鎖性を必ずしも前提とせずに。

1）研究対象に内在する（とされる）文脈化

	内的文脈（同一系列内の文脈）	外的文脈（複数の系列からなる文脈）
対象内在的文脈化	ゴフマンのフレーム分析 エスノメソッド インター・テクスチュアリティ 自然科学者の自然像・自画像（慣習） 経済学者の経済像・自画像（慣習） コロニアル人類学の土着主義	コンベンショナルな社会学（規範・階級 etc.などの天下りカテゴリ） 古典的文学研究（著者の意図という外部） リアリズム文学研究（反照規定的に形作られる外部？） 社会的ネットワーク論（階級・ジェンダー・エスニシティ etc.） アクター・ネットワーク研究（上記+モノ・自然・知・制度） 　ラトゥールの科学技術研究 　カロンの市場研究 ポスト・コロニアル人類学 ネットワーク切断・連接の美学研究（ストラザーン）

2）研究者による文脈化

…なぜ、私たちは他者の脱／文脈化にこうも敏感に反応するのだろうか。ここで筆者が暫定的に述べることができるのは次の点である。それは、文脈探索をどこで停止させるか、どこでどのように区切るのかについての指針、あるいは塩梅とでも呼びうるものが、研究者や研究集団ごとに異なるからだ、と。このいかにも平凡な解答は、しかし、もうひとつの文脈化、すなわち研究の目的にそって対象をくくりだす際の文脈化の問題系を引き寄せる。デリダを批判したサールが、私たちに投げかけた問いである。

諸学の様式と整合的な個別研究の目的設定が、研究の「適切な」文脈を決定する（目的がなければ、文脈は立ち現れない）

	内的文脈（同一系列内の文脈）	外的文脈（複数の系列からなる文脈）

研究者による文脈化	常識人の無知	マルクスの下部構造（究極原因）
	〃	フロイト・ラカンの無意識（究極原因）
	〃	フーコーの布置
	マリノフスキーの機能主義	タイラーの進化論
	ギアツの解釈学	レヴィ＝ストロースの構造主義
	アナル学派	歴史法則の探求（広義の進化論）
		ホワイト・ラカプラなどのメタ・ヒストリオグラフィー
	サバルタン・スタディーズ	ポスト・コロニアル研究
	社会学のフィールドワーク主義	
	エスノメソドロジー	（ガーフィンケルは理解可能か？）
	科学哲学の多元論（coherece 主義）？	科学哲学の物理主義（correspondence 主義）？

1　「対象に寄り添う」という号令に素直になりすぎないためのサンプル・ケースとして

ｉ）進化論と機能主義：脱文脈化批判が生み出した人類学のフィクション
タイラー進化論を Out of Context と糾弾したマリノフスキーは、地域社会の内的文脈の重要性を強調。しかし同時に、対象社会から切断された学問としての人類学を、対象社会の外に強固に制度化した（現在も残る役割分担）。さらに、一般読者読まれるタイラーと、読まれないマリノフスキー [Strathern 1987]

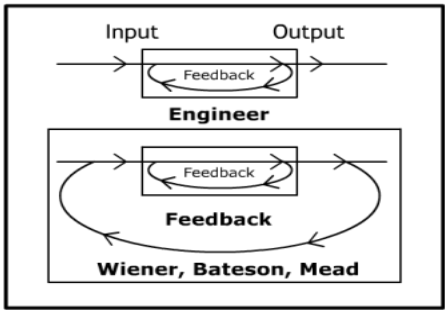
ⅱ）機能主義と構造主義の捩れた関係
機能主義とその多くの末裔が内的文脈に拘っているように見えるのは、研究者による文脈化と対象社会の文脈を重ね合わせるから。しかし①で示したように、それは疑わしい。
何が同一系列とされ、何がそうとみなされないのかが、むしろ重要。

	内的文脈（同一系列内の文脈）	外的文脈（複数の系列からなる文脈）
対象内在的文脈化	機能主義（地域：単一）	構造主義（地域：複数）
研究者による文脈化	構造主義（テーマ：神話・親族）	機能主義（テーマ：可能な限り多くの事象）

2　父殺しに耽ったり、他の学的作法を Our of Context と論難するよりも、「文脈化」の様式や美学の「複数性」にこだわり、そこから何をつかみとるか（対話?うーん。。。）

3　対象内在的文脈化と研究者による文脈化のズレをどう考えるか？

ⅰ）人類学における距離の喪失論：reflexivity から lateral reflection へ

ⅱ）対話は本当に可能なのか？：ポストコロニアル人類学の顛末、モノローグにならないための「似て非なるもの」へのこだわり

ⅱ）セカンド・オーダー・サイバネティクスの問題系（cf.エスノメソドロジーの reflexivity of account, ルーマンのオートポイエーシス）